

ライフストーリーの語り合いで保育観を養う — 平成 25 年度教員免許更新講習（選択領域）実践報告 —

仲 真人

“Cultivating Beliefs about Child Care through Sharing Life Stories”
Practical Report of Teacher Certificate Renewal Course (Selective Area) in 2013

Masato Naka

1. はじめに

教員免許更新講習は平成19年の改正教育職員免許法の成立によって、平成21年4月1日から導入された制度で、教員免許に10年間の有効期間を設け、免許更新の手続きとして有効期間満了直前の2年間に、教職課程を持つ大学等が開講する講習の受講・修了を義務づけたものである。更新講習は「その時々で教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ること」をめざして実施され、受講者は「教育の最新事情」に関する必修領域を12時間以上、「教科指導、生徒指導その他教育の充実」に関する選択領域を18時間以上、それぞれ受講する。おもな受講対象者は幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校の現職教員および採用予定者であるが、幼稚園教諭免許状を保有している保育士（認可保育所の保育士および幼稚園を設置する者が設置する認可外保育施設の保育士）も受講対象者に含まれている。これは幼稚園教諭免許と保育士資格の両方を持つ「保育教諭」を職員とする「幼保連携型認定こども園」への移行を円滑化する目的でとられた措置である。

筆者は平成25年の8月18日と10月20日、本学主催の教員免許更新講習で講師を務めた（会場：新潟日報メディアシップ）。担当したのは「教科指導、生徒指導その他教育の充実」に関する選択領域で、テーマは「ライフストーリーの語り合いで保育観を養う」というものである。講習は、ほぼ同内容のものを2回、ことなる受講者を対象に実施した。下は本学HPで告知された講習の概要である。

「ライフストーリーとは、個人が自分自身について語る物語のことを示します。本講習では、ライフストーリー・アプローチの手法について学び、その後にグループに分かれて互いのライフストーリーを語り合います。幼児教育の現場で日頃感じていることや、仕事のやりがいなどについて、各自の体験を共有することで、業務における課題を乗り越えるヒントを探るとともに、保育者としてのモチベーションとキャリア意識の向上を目指します。」

本稿はこの講習の実践報告として執筆されたものである。講習は後述する4点のねらいの達成をめざ

して実践されたが、受講者へのアンケート、感想レポートおよび電話聴取で得られた評価は全般的に良好であり、ねらいは十分に達成されたものと判断した。以下、今回の講習の趣旨を「ライフストーリーについて」および「ライフストーリーの語り合いについて」で述べた後、「講習のねらい」「実際の講習の概要」「受講者による評価と感想」「自己評価と今後の課題」の順に実践を報告する。

2. ライフストーリーについて

ライフストーリー (life story)¹とは、個人が自分自身の人生をふり返り、どのような経験をへて現在の自分になったのかを説明する物語である。自叙伝のように過去の人生全体をふり返るものもあるが、人生の特定の時期に焦点をあてて語られるライフストーリーも多い。戦争体験をふり返って語る、職人が修業時代を語る、闘病体験を語るといったものがそれである。また、人生をふり返るといっても、実際には個人が経験したことのすべてが語られるわけではない。語り手が聞き手に伝えたいこと、人生において重要と思われることを中心に、実際の経験の中から取捨選択された出来事によってライフストーリーは構成される。

ライフストーリーでは出来事の関連性を示すプロット（筋立て）が重要な役割をはたす。例えば「私は20歳で就職した。23歳で結婚した。仕事を辞めた」という語りは、3つの出来事を時系的に並べただけで、出来事どうしの関連性は不明である。これに対して「私は20歳で就職した。けれども23歳で結婚して仕事を辞めた」という語りは、「けれども」というプロットを示す言葉によって3つの出来事は関連づけられ、意味と脈絡を備えた小さな物語になっている。必ずしも意味や秩序があるとは限らない人生の様々な出来事に、意味や脈絡を持たせ、首尾一貫したライフストーリーとして語ることを可能にするのは、語り手が施すプロットの力である。ライフストーリーではまた、語られた経験に対する語り手の「評価」が述べられることも多い。例えば「私は20歳で就職した。けれども23歳で結婚して仕事を辞めた。そのことをずっと残念に思っていた」という語りでは、直前に語られた経験に対しての「そのことをずっと残念に思っていた」という評価が述べられている。こうした評価はプロットで構成された物語の枠組みを客観的に捉えられる現在の語り手の視点から行われており、語り手が語りを通じて聞き手に伝えたいことを指示している。

ライフストーリーは語り手の過去の経験をありのままに伝えるものではない。語り手は過去の経験をふり返って語るが、語られたライフストーリーには語り手による出来事のとらえ、プロット化、評価が施されている。ライフストーリーは現在の語り手の視点から省察され、再構成された人生の物語であり、過去よりもむしろ現在の語り手のアイデンティティや価値観、ものごとの見方などを表象するものである。

以上のような特性をもつライフストーリーは、近年、社会学、文化人類学、教育学、心理学、社会福祉学、歴史学、看護学、医学といった学問領域において、個人のアイデンティティや経験の主観的な意味を解明する質的研究の素材、データとして注目され、活用されている。わが国の教育学では近年、教師のライフストーリーを活用した教員養成、教師教育の取り組みが目立っている。D・ショーンによる「省察的実践家」の概念が紹介されて以来、教員養成や教師教育の分野では実践の省察、実践知への関心が高い。ライフストーリーの語り手が語り手に深い自己省察を促すことに注目した研究者、教員は、教師のライフストーリーから教員養成の学習材を抽出する試みや、授業実践を語るライフストーリーから授業改善や教師教育のための知見を得る取り組みを重ねている²。今回の講習も、ライフストーリーの語り手が語り手に深い自己省察を促すことに注目した点は、近年のライフストーリーを活用した教員養成、教師教育の取り組みと共通している。

3. ライフストーリーの語り合いについて

「ライフストーリーの語り合い」という講習の主活動は、セルフヘルプ・グループなどで実践されている「わかちあい³」をモデルにしたものである。セルフヘルプ・グループとは病気や障がい、生活上の問題等を共有する人々がつくる当事者団体のことで、「わかちあい」はセルフヘルプ・グループで重要な位置を占めているミーティング形式の活動である。その形式は参加者が一人ひとり自身の体験や思い、近況等を語り、語り手以外の参加者はその語りを傾聴するというものである。何をどう語るかは個々の語り手に任されているが、アルコール依存症のグループでは飲酒による失敗談や断酒の継続状況、家族介護者のグループでは日ごろの苦労や被介護者の近況、遺族や死別体験者のグループでは故人の思い出やみとり時の悔恨という具合にグループごとに特徴的な語りのテーマがある。基本的なルールは語り手への批判や助言を述べないこと（「言いっぱなし」の「聞きっぱなし」）である。これは参加者が語りにくいことも安心して語れるようにするための配慮である。

筆者はこれまでに死別体験者、高齢者、家族介護者など、いくつかのセルフヘルプ・グループの活動にかかわりを持ってきたが、実際に観察した「わかちあい」は当事者によるライフストーリーの語り合いとほぼ同義のものであった。「わかちあい」が参加者にもたらす効果を文献と実体験をもとに整理すると、次の6つに要約できる。

- ① 自己省察を深める。
- ② 様々な気づきや学びを得る。
- ③ 意識やアイデンティティの変容。
- ④ 語ることを通じてのカタルシス（浄化・解放）。
- ⑤ 孤独の緩和。
- ⑥ 相互扶助関係を育む。

筆者が死別体験者のセルフヘルプ・グループが主催する、離別の悲しみを語り合う「わかちあい」に参加した時の経験を述べたい。会場となった室内には口の字型にテーブルが配置され、そこで10人余りの聞き手を前に自分の離別の体験を語った。毎月の活動で2回、3回と体験を語り、また自分と同じような死別体験を持つ参加者の語りを傾聴するうち、それまで抱えていた名状しがたい喪失感や悲嘆が何となく整理され、経験あるいは記憶へと変換されていく感覚を味わった。それは直ちに喪失感や悲嘆を緩和するものではなかったが、肉親との別れを自分の人生の一部として受容する素地が形成された思いがした。未整理で名状しがたかったものが、具体的な経験あるいは記憶へと変換される感覚、これはライフストーリーを語ることでもたらされた効果だと思われる。

また、他者のライフストーリーを傾聴することは、様々な気づきや学びを聞き手にもたらす。筆者はその後、特別に許可をもらい、当時勤務していた看護専門学校で学生数名とともに上記の「わかちあい」に参加した。その折に傾聴したのは、留学中の愛息を不慮の事故で喪った父親の語りだった。愛息の死をみとることができなかった無念と悲嘆が吐露された後、日本からの遺族を迎えた救急病院の看護師一同が、「神に召されし子へ」と題された詩を献じてくれたことへの感謝の思いが語られた。その語りを傾聴した学生たちは、看護師の役割について貴重な示唆を得たようであった。

筆者が担当した講習の主活動である「ライフストーリーの語り合い」は、以上に述べた筆者自身の経験を下敷きにしている。一般的な「わかちあい」を構成するのは、病気や障がい、生活上の問題等を共有する当事者であるが、それを教師・保育者に置き換えてライフストーリーの語り合いと傾聴を実践し、専門職としての自己省察と相互的な学び、気づきを得ることをねらいとした。また、「わかちあ

い」とは異なり、講習の参加者は同じ仕事に携わる専門職どうしであるため、「語り手への批判や助言を述べない」というルールを緩めて、質問や意見交換の機会を設けることにした。日常的に実践について語り合う機会を持つことが、専門職としての教師の成長につながるとする報告⁴があるものの、幼児教育・保育の現場は多忙であるため、保育者どうしで知り合い、情報交換をする機会が乏しい。今回の講習では「ライフストーリーの語り合い」を仲立ちとして、受講者どうしが知り合い、語り合うこともねらいに加えた。

4. 講習のねらい

教員免許更新講習「ライフストーリーの語り合いで保育観を養う」は、ライフストーリーを語ることが語り手の自己省察を促すことに注目した筆者が、これをセルフヘルプ・グループなどで行われている「わかちあい」の形態で実践することを試みたものである。「わかちあい」では特にテーマを決めることなく語り合いと傾聴を行うのが一般的であるが、今回は「教科指導、生徒指導その他教育の充実」という教員免許更新講習の趣旨を実現するため、「保育者としての私」という共通テーマを設定して語り合いと傾聴を実践することにした。

本講習のねらいであるが、インターネットに告知された講習の概要から抜粋する。

「幼児教育の現場で日頃感じていることや、仕事のやりがいなどについて、各自の体験を共有することで、業務における課題を乗り越えるヒントを探るとともに、保育者としてのモチベーションとキャリア意識の向上を目指します。」

講習では次の4項目のねらいを主活動に先立つ講義で提示した。

- ① 保育者・教師として働いてきたライフストーリーを語ることを通じて、専門職としての自己を省察する。
- ② 同じ職業に従事してきた仲間のライフストーリーを傾聴することを通じて、専門職としての自己を高める気づきを得る。
- ③ きめ細かな対人サービスと感情のコントロールを要求される保育者・教師に特徴的なストレスや孤独を緩和する。
- ④ 同じ職業に従事している新たな仲間と出会う。

ねらいの③は「教科指導、生徒指導その他教育の充実」という教員免許更新講習の趣旨から逸れるが、保育者・教師のキャリア形成において重要な課題であると考えて提示した。近年の幼児教育・保育の現場は多忙であるうえに人間関係のストレスが大きい。養成校を卒業し、夢を抱いて幼稚園・保育所に就職した保育者が、数年の内に離職してしまう例は少なくない。「わかちあい」のグループワークがもたらす孤独の緩和や相互扶助関係を育む効果を、受講者にも実際に体験してもらうため、語り合いでは日ごろ感じているストレスや悩みについてふれることを提案した。

5. 講習の概要

i) 受講者数

受講者の人数は8月18日の講習が37人、10月20日の講習が35人であった。受講者はおもに中越、下越

地域の小学校、幼稚園、認定こども園、保育園で勤務する教員および保育士で、年齢は30代から50代。勤務先の種別と年齢層は次の表のとおりである。

【8月18日の講習】

勤務先	30代	40代	50代	合計
こども園			1	1
小学校			1	1
保育園	3	3		6
幼稚園	20	7	2	29
合計	23	10	4	37

【10月20日の講習】

勤務先	30代	40代	50代	合計
こども園	6		2	8
保育園	2	4	4	10
幼稚園	10(1)	4	3	17(1)
合計	18	8	9	35

(括弧内は男性の人数)

ii) 事前の課題

あらかじめ「ライフストーリーの語り合い」のイメージをもってもらうため、受講者には下の「事前の課題」を郵送した。〈テーマ①〉が語り合いの予行演習で、〈テーマ②〉が主活動の課題である。受講者は15分、20分という持ち時間の長さ戸惑った様子で、語りの内容のメモ書きを用意してくるものが多かった。

以下、2回目の講習時（10月20日）の記録にそって、講習の展開とその様子を述べることにする。

「ライフストーリーの語り合いで保育観を養う」：事前の課題

ライフストーリーとは、人が自分の人生の全体、または人生の一部について語った物語のことです。10月20日の講習では、受講生がいくつかのグループに分かれて、グループごとにライフストーリーの語り合いを行います。受講生のみなさんは、事前の課題として、次の2つのテーマについて、自分のライフストーリーを語る準備をしてきてください。

◆テーマ①：「私について」（自己紹介の語り）

あなたのこれまでの人生について語ってください。どんな土地で生まれ、どんな子ども時代をすごしたか、それから、どんな経験をして、今のあなたが生きているのか、好きなこと、家族のこと、趣味、大切にしていること、これからの夢。そうしたことを最初のグループワークの時間に語っていただきます。持ち時間は1人15分以内です。

◆テーマ②：「保育者としての私」

2回目のグループワークの時間には、保育者として働いてきた自分について語っていただきます。例えば下記のようなトピックにそって、「保育者としての私」を語る準備をしてきてください。持ち時間は1人20分程度を予定していますが、その時の状況に応じて調整したいと思います。

- ・ どうして保育の仕事を選んだのか。
- ・ じっさいに保育者として働きはじめて、どのようなことを感じたか。
- ・ これまで、どのような地域・職場で、どのように保育に携わってきたか。
- ・ 保育者としての自分を育ててくれた出来事や出会い、あるいは自分にとって転機となった出来事や出会いについて。
- ・ 保育に携わる中で、どのようなことに悩み、どのようなことに喜びを感じているか。
- ・ 保育者として、自分が大切にしていること、あるいはめざしていること。
- ・ 自分にとっての理想の保育とは。

◆任意の課題：「グループワークで聞いてみたいこと」

上の2つの課題の他に、この機会に他の人の意見や考えを聞いてみたいことがあれば用意してください。保育で悩んでいること、保護者への対応、子育て支援、人間関係のこと、等。2回目のグループワークの語りの中で提示して、グループで語りあってみましょう。

「事前の課題」と考えると気持ちが重くなってしまいますが、今回の講習は「授業」という感じではなく、同じ職業を選んで働いている仲間どうしが、年齢や肩書ははずして語り合い、共感し、励まし合う、そうした出会いの場になりたいと考えています。上手に話せなくてもかまいません。話が脱線してもかまいません。講師をつとめる私も、「先生」という感じではなく、案内役としてみなさんのお手伝いをしたいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。

iii) 講習の流れ

下は講習のタイムスケジュール表である。会場は50人程度収容可能な教室で、椅子と机は可動タイプである。最初の講師自己紹介では、導入として筆者自身のライフストーリーを約15分間で語った（これがライフストーリーの理解に役立ったという感想を受講者から得られた）。それに続く講義は一斉授業の形態、語り合いと傾聴はグループ・ワークの形態で行った（主活動の終了までグループ分けを継続）。グループは事前に決めておいたものを当日発表した。1グループ5名を基準に、年齢、勤務地、勤務先（同じ職場から複数の受講者が参加していた）が偏らないように受講者をグループ分けした。主活動の「保育者としての私」の語り合いと傾聴には午後の3時間をあてた。

9:20 ~ 10:10	講師自己紹介 ライフストーリー・アプローチについての講義
10:10 ~ 10:25	休憩
10:25 ~ 11:55	グループ分け 「私について」の語り合いと傾聴（ウォーミング・アップ）
11:55 ~ 13:05	お昼休み
13:05 ~ 14:35	「保育者・教師としての私」の語り合いと傾聴
14:35 ~ 14:50	休憩
14:50 ~ 16:20	「保育者・教師としての私」の語り合いと傾聴（つづき）
16:20 ~ 16:35	休憩
16:35 ~ 17:15	修了認定試験（レポート）
17:15 ~ 17:30	講習評価アンケート

iv) ライフストーリー・アプローチについての講義

下は午前の講義の内容である（講義で使用したパワーポイントのスライドを表の書式に置き換えたもの）。講義ではライフストーリーを語る事が単なる思い出語りではなく、自己省察のための実践であることを強調した上で、ライフストーリーの語り合いと傾聴のねらいを説明した。また、個人情報の守秘義務についても確認した。

1. ライフストーリーとは何か	・ライフストーリーとは、個人が自分の生きてきた人生の全体、または一部分を振り返って語る物語のことをいう。
2. ライフストーリー・アプローチの基本的な考え方	・ライフストーリーを語ることは、たんに過去の自分について語ることではない。自分に向き合い、自分と対話し、自分とは何者かを省察することである。 ・自己とは、個人が自分自身の体験に意味を与える、その行為を通じて作り出される。
3. 体験に意味を与えるのは私たち自身	・過去から現在に至るまで、日々積み重なっていく私たちの体験は、それ自体、意味も脈絡ももたない無数の出来事の連なりに過ぎない。 ・自分の人生を振り返って語るということは、本来、無数の出来事の連なりに過ぎない過去に意味と脈絡を与え、自分がどのようにして現在の自分になったかを説明することでもある。
4. ライフストーリーが語るのは「現在の自己」	・ライフストーリーは過去の体験を振り返って語る物語である。しかし、過去の体験に意味と脈絡を与えているのは現在の自分である。ライフストーリーの語り手は、過去を語ることを通じて現在の自己について語っていると言っていい。
5. 「自己」とは何か	・私たちは現在の自己の一貫性を保つため、日々新たに積み重なっていく体験に対しても意味と脈絡を与え、新たなライフストーリーを生み出していく。ときには、より説得力のある物語を生み出すために、体験にまったく新しい意味と脈絡を与えることもある。私たちの自己とは、そのような営みの反復の中で作り出された個人的なイメージ（像、観念）である。
6. 何のために実践されるのか	・ライフストーリーを語ることによって、私たちは普段意識されることのない自己と向き合い、自己についての省察を深めることができる。そうしたことから、ライフストーリーの語り合いは、様々な困難や苦しみを抱える人々の治療や自己回復の現場で実践されることが多い。
7. 「聞き手」の役割	・ライフストーリーを用いた治療や自己回復の実践で欠くことができないのは、語り手の語る物語に共感しつつ、対等の立場で傾聴する聞き手の存在である。 ・よい聞き手を得ることによってライフストーリーの語りは促され、語り手の自己省察はより深いものとなる。また、語りを傾聴しあうことを通じて、困難や苦しみからの回復をめざす共同体的な連帯感も育まれる。
8. 語りあいと傾聴の治療的効果	・困難や苦しみを共有する人々がグループをつくり、ライフストーリーを語りあい、傾聴しあうことでもたらされる治療的効果として次のものが考えられる。 ①苦しみ、痛みのカタルシス（解放） ②孤独の緩和 ③新たなライフストーリーの獲得 ・③の「新たなライフストーリーの獲得」とは、例えば「孤独の緩和」「苦しみからの回復」「新たな気づき」等が、語り手のライフストーリーに加わることをさす。
9. この後の講座の内容	・今回はワークショップ（体験型講座）形式を採用し、受講者によるライフストーリーの語りあいと傾聴を実践します。講座のねらいは「保育者・教師のキャリア省察と意識啓発」ですが、より具体的には、次のことを予定しています。 ①保育者・教師として働いてきたライフストーリーを語ることを通じて、専門職としての自己を省察する。 ②同じ職業に従事してきた仲間のライフストーリーを傾聴することを通じて、専門職としての自己を高める気づきを得る。 ③きめ細かな対人サービスと感情のコントロールを要求される保育者・教師に特徴的なストレスや孤独を緩和する。 ④同じ職業に従事している新たな仲間と出会う。
10. この後の講座の流れ	（省略：講習のタイムスケジュールの確認）
11. 守秘義務を守りましょう	・ライフストーリーの語りあいでは、個人のプライバシーに関わるものが語られます。本講座に参加する受講生の皆さんは、語りの内容が外部に漏えいし、プライバシーの侵害を招かないよう、守秘義務を守ってください。

v) 「私について」の語りあいと傾聴

「私について」の語りあいと傾聴は、グループ・メンバーの自己紹介と午後の主活動の予行演習を兼ねた実践である。冒頭で受講者に次の指示をあたえた。

- ① 進行役とタイムキーパーを決める。
- ② 順番に「私について」を語り、傾聴する（15分以内）。
- ③ 語りが終わったら、聞き手は小さな拍手で語り手に感謝の気持ちを伝える。
- ④ 語りが早めに終了した場合は、自由に語り手に質問したり、言葉をかけたりする。

はじめは初対面の受講者どうして緊張も見られたが、まもなくどのグループもたがいに打ち解け、昼の休憩時には「和気あいあい」（会場スタッフの言葉）の雰囲気生まれた。昼休みには一緒に昼食を摂る受講者の姿も見られた。

vi) 「保育者としての私」の語りあいと傾聴

講習をはじめの前は「15分のあいだ語れるのだろうか」と不安を述べる受講者もいたが、「私について」の語り合いと傾聴を終えてからは「意外にたくさん話してしまった」という声があちこちで聞かれた。どのグループの雰囲気も午前中よりずっとリラックスしたものになっていた。

主活動に入る冒頭で受講者に次の指示をあたえた。

- ① 先ほどと同じように順番にライフストーリーを語る（20分程度）。
- ② 一人の語り手が語り終えたら、聞き手は順番に感じたことを述べる（語りの分かちあい）。ただし、語り手を批判したり、否定したりすることは言わない。語り手から「グループワークで聞いてみたいこと」を提示されたら、それぞれ自分の考えや意見を述べる。
- ③ 一人の語りりと分かち合いが終わったら、先ほどと同じように小さな拍手で語り手に感謝の気持ちを伝える。
- ④ 全員の語りりと分かち合いが終わって時間が余っていたら、それぞれの感想を述べ合う。
- ⑤ 時間が余っていたら、各グループでどのような語り合いがあったか、全体発表を行う。

すでに述べたように、セルフヘルプ・グループなどで実践される「わかちあい」は、語り手に批判や助言などを述べないことをルールとしている。しかし、今回の講習では「ライフストーリーの語り合い」を仲立ちとして、受講者どうしが知り合い、語り合うこともねらいとしているため、②の「語りの分かちあい」の指示を加えている。また、「任意の課題」として「グループワークで聞いてみたいこと」を提示したのも、すでに述べた通りである。

「語り合い」がスムーズに進行しないグループがあれば、アドバイスの言葉かけをするつもりだったが、主活動ではどのグループも滞ることなく語り合いと傾聴の実践が展開された。とはいえ、語り合いのペースがグループによって違っていたため、もっとも早く終了したグループと最終のグループとでは30分近い時間差が生じた。

vii) 修了認定試験（レポート）

本講習はライフストーリー・アプローチについての講義と、ライフストーリーの語り合いと傾聴のグループワークで構成されている。主活動のグループワークは知識の習得を直接の目的としない体験型学習であるため、本講習についての感想レポートの提出を修了認定試験とした。

6. 受講者による評価と感想

下は講習の最後に実施した本講習についての評価アンケートの結果である。

評価基準	本講習の内容・方法についての総合的な評価				受講したあなたの最新知識・技能の修得の成果についての総合的な評価				本講習運営についての評価			
	よい	だいたいよい	あまり十分でない	不十分	よい	だいたいよい	あまり十分でない	不十分	よい	だいたいよい	あまり十分でない	不十分
8月18日	29	8	0	0	25	12	0	0	26	10	1	0
10月20日	18	16	0	0	21	12	1	0	21	13	0	0

講習評価アンケートとは別に、受講者から寄せられた評価と感想を下に紹介する。2回目の講習の終了時、レポート内容の公表と電話による聴取に協力してくれる受講者を募り、9名の受講者の承諾を得た。そのうちの1名はただ1人の男性受講者である。初対面の女性ばかりの「語り合い」に緊張せずに参加できたかを確認したかったので、特に指名して協力をお願いした（後で問題なく受講できたとの感想をいただいた）。他の8名はそれぞれ違うグループから、年齢が偏らないように配慮して人選した。電話による聴取は講習後3週間経過した11月中旬に行った。しばらく時間をおいた後で講習が有意義なものだったかどうかを確認するため、あらためて講習の感想を聞いた。また、今後の講習に向けて、改善すべき点があれば指摘してもらいたいとお願いした。表の破線の上がレポートの記述、破線の下が電話での聴取内容である。なお、1名は電話連絡がとれなかったため、レポート内容の公表もとをやめた。

<p>新たな発見なのですが、同じグループにいた先生から「そうかもしれない」と頷ける話を聞くことができました。それは以前から何かの度に話題にあがっていた保護者についてのことです。最近の保護者は子どもを迎えに来て「ありがとう」のひとつもなく、お金を払っているんだからあたり前といった顔でだまって連れて帰る人も見られます。ですが昔は教師を敬い保育してもらったことを感謝してくれていたことについて、それは時代の変化、保育の保護者向けのサービス化が原因だと思っていました。ですが今日聞いた話では、少子化に伴う子育て支援の充実も影響しているのではないかとということでした。<後略></p>
<p>プライベートで大変なことを経験した保育者が「子どもの前に立つのもつらかった時期もあった。しかし、そうしたこともあったから仕事を続けている」と語るのを聞いて励みになった。こうした語り合いは初めての経験だった。自分自身の深い部分まで話している方もいて、感じることを、考えることがいっぱいあった。講習が終わった後も映画を観た後のような余韻に浸っていた。そういうよさもあった。改善点は特になし。 【幼稚園勤務：30代（男性）】</p>
<p>課題に取り組む前は、「これまでの経験によって培った保育者としての自分をいかに伝えるか」ということなのかと思っていた。そして考えはじめると（自分には）立派な部分が少なくて「どうしよう」と不安になった。私は子育てで一度仕事も辞めているし、幼稚園教諭の更新なのに保育士だし…。「仕事の上で自信をもって語れるところがない」と思いながらの自分の振り返りだった。でも、その自身のないところも、それを補うために始めた勉強も、今の自分をつくっていて、その自分に満足していると語る事ができた。<後略></p>
<p>講習はとてもよかった。みなさんの話を聞いて励みになったり、すごいと思う反面、自分の弱い部分も出せる設問ならばよかった。傾聴スキルを学ぶ講習が事前にあってもよかった。自分は支援センター勤務で一般の保育者と仕事内容が違う面もあった。力強く頑張って、成果を上げている人が自分のグループのメンバーには多かったように思う。自分はやや萎縮してしまった。しかし、自分を語る経験は「何が自分をつくっているのか」を考えるよい機会だった。資格の更新講習としてはとてもよかった。 【子育て支援センター勤務：30代】</p>

<p>グループワークということで緊張と「嫌だな」という気持ちもあったが、保育者という同じ立場の人とたくさん話ができてよかった。自分よりもはるかに経験を積んでいる先生方のお話、同年代の先生方のお話、その中で経験年数は違っても、悩みや保護者への対応など、共通する部分があり、「ベテランの先生でも同じように考えていらっしゃるのだな…」と安心するところも多くあった。つらい大変な新人時代もみなさんあり、それでもやはりこの仕事をしていること、子どもが好きで、日々、「子どものために」と仕事をしているのだと思った。普段の研修では幼稚園の先生としか話をしないので、今回は保育園の先生方ともいろいろお話ができてよかった。＜中略＞ 悩みなども「これ」という解決法はないが、それぞれが体験談を話したりすることができて、みなさんにとってもいい場だったと思う。</p>
<p>あまり経験することのできない機会でもよかった。自分たちのグループは早く語り合いが終わってしまったので、もう1テーマあったらよかったと思う。グループの方の勤務先も分かったので（注：グループ表に記載）、いろいろ聞きたいことも聞けた。 【幼稚園勤務：30代】</p>
<p>様々な立場の方のお話を聴き、とても充実した時間を過ごせました。保育観というものは、みんなそんなに違いはなく、保育の方法を行う上で、重きを置いている所に少し違いや、それぞれのカラーが出るのだなと感じました。日々、試行錯誤しながら一つ一つの積み重ねで培ってきた事、大切にしていることを言葉にして語り合う事で、大切なことを再認識するとともに、その保育観を実践し、実りある保育を行っていかうと、また気持ちが引き締まりました。＜中略＞ グループで最後に、この講習について要望等、話したこと。①名札で番号がついているので、はじめから指定されたグループの席に座るようにすると、スムーズにグループワークにとりかかれるのではないかと。②地域を離す配慮をしてくださっているとはいえ、やはり新潟市に近い人たちはばかりなので、全部を話すことができない。という話がありました。</p>
<p>講習はとても意味があった。「保育者は長女が多い」ということが面白かった。他の方のエピソード、ライフストーリーがとても面白かった。後輩保育者へのアドバイス、指導の仕方、人それぞれの教えるタイミングなどを学び、心の余裕ができた気がする。自分と向き合うことができた経験だった。一緒に受講している人のことがわかり、次の講習の時もよい関係が持続したのがとてもよかった。改善点としては、語り合いの最後に全体の振り返り、共有の時間が持てればよかったと思う。 【幼稚園勤務：30代】</p>
<p>＜前略＞（亡くなった）主人の話の時は少し言葉がつまってしまいましたが、聞き手となる方たちの表情がとても穏やかで、何でも受け入れてくれるオーラが出ていたように思います。だから最悪（な体験）から3つの良い事を見つけて語る事ができた。聞くことはいかに大切かを知りました。安心感からその後は主人の話はどこへやら。笑顔で保育の悩み、コミュニケーションについてなど、ぐちまで話し合うことができた。明日からまた仕事。今日、この気持ちを忘れず、「正直である事は自分のからまっている物をほどこしてくれる」まずは先週大失敗をし迷惑をかけた主任に明日朝一で謝ろうと心に決めた私です。</p>
<p>講習を受けたのは職場で失敗をして、すごく落ち込み、自分に自信がなくなっていた時だった。「正直である事が大切だ」というグループの方のライフストーリーを傾聴して、「自分も正直にならなければ」と、主任に失敗を謝りに行く勇気ももらった。自分は私立園に勤務しているので、他園の方と話す機会がない。いろいろな考えを聞けてとてもよかった。改善点は特になし。 【幼稚園勤務：40代】</p>
<p>ライフストーリーの語りというテーマがとても重荷になり、どうしようかと考えた。でも正直、私の立場で今、後戻りは出来ず、何が何でも（講習を）受けなければいけない状況でした。でも先生の「気楽に臨んでください」の言葉を受けて、今日、出席出来て良かったと感じています。なかなか自分の人生をふり返ることの出来ない日々、必死で過ごす中、こんな時間もあって良かったと思います。4人グループでしたが、めぐり合わせの様に、個人的にもどこかでつながっている方々でした。こんなめぐり合わせってない！と思ったぐらい、色々な話が出ました。前から知っている方々の様に安心して話が出来ると何なのでしょう！解決にはならない内容でも、共感してもらえた！という心地良さが私の中にも残りました。＜後略＞</p>
<p>新設のこども園の責任者になることを命じられ、望んでもいないことだったので、戸惑いや葛藤を抱えている時期だった。講習は自分をふり返るよい機会になった。これからの仕事のことを思うとネガティブな気持ちになってしまうのだが、講習でグループの方に話を聞いてもらって、まだまだ課題はあるけれど頑張ろうという気持ちになれた。若い人たちの話を聞き、頑張っていることにも励まされた。何がどう変わったということではないのだけれど、とてもよい講習だった。改善点は特になし。ぜひ今後も続けてほしい。いろいろな人にああいう場で私たちのような気持ちになってほしい。 【幼稚園勤務：50代】</p>
<p>私は講習に参加する前、知らない人の前で自分について語るの嫌だな～と思っていました。しかし実際に人の生き方を聞くと、同じことで悩んでいる人がいるんだなという安心感。若い時そんなこと私も思っていたなという親近感などを感じることができました。1日という長い時間、それもまったく知らない人と、こんなにいろいろ話すことで、何かが解決したわけでもないのですが、今、私の中にさわやかな空気が流れているのを感じています。この気持ちは何なのでしょう？これがカウンセリングの力なのか～と。「語り合いと傾聴を大事にすること」で一人一人の心が解放され、何も答えが出なくても、私も次こうやってみようかな～と思えることができることが大事なんだとまたあらためて感じました。またこんな講習があったら参加してみたいと思いました。</p>
<p>後輩の保育者への指導という面で、講習で若い人の話を聞き、悩みや考え方がつかめてよかった。仕事のこと以外のプライベートな話題もいろいろあり、子育てをする女性どうしという立場で語り合えたことがとてもよかった。改善点は特になし。 【幼稚園勤務：50代】</p>

＜前略＞ 今日初めてお会いした方々と、終了間近には以前からの知り合いの様な盛り上がりのグループトークとなりました。普段はお喋りの私ですが、まず聞くことに集中しました。そしてお話されている方の伝えたい事、悩んでいる事、夢…。色々と聞くうちに「うん、そうそう」「そっか〜」「なる程…」と勉強させられる事ばかりでした。＜中略＞ 現在、私はクラス便りのことでとても悩んでいます。今日はそれを持参して他の方にも見て頂きました。賛否両論ありましたが、私はそれを書く為に主任に何度も修正され、家に帰って泣いたのです。悔しくて何とか発効日に間に合いましたが…。でも悩んでいるのは私だけではないことを今日の語りいでしみじみ実感しました。

グループの世代の違う5人の色々な経験が聞けて面白かった。とても親密な気持ちになった。翌週の講習ではグループの人とならんで座り、休憩のときも仲良く会話した。園内では相談できないことを相談することができた。グループトークの機会をいただき感謝している。がんで闘病された方から「子どもに助けられて仕事を続けてきた」という話を傾聴して、自分が今まで何気なく保育していたのが変わった。子どもに向き合う姿勢や子どもを見る目が変わった気がする。子どもに接することが惰性的になっていた自分を見つめ直して現場に出たら、子どもたちにより表情が出るようになった。自分の成長が感じられた。

【幼稚園勤務：50代】

7. 自己評価と今後の課題

今回の講習に対する受講者の評価は全般的に良好なものだった。以下、受講生からの評価と感想をふまえて、今回の講習についての自己評価と今後に向けての課題を述べたい。

自己評価は先に示した4項目のねらいの達成について検討することにする。＜①専門職としての自己を省察する＞については、「自分と向き合うことができた経験だった」「講習は自分をふり返るよい機会になった」「なかなか自分の人生をふり返ることの出来ない日々、必死で過ごす中、こんな時間もあって良かったと思います」等の感想が多いことから、ねらいは十分達成されたと判断したい。印象に残ったのは、年齢が30代の受講者よりも、40代、50代の受講者の方がより積極的な表現で評価してくれたことである。今回の講習では保育者・教師としてのキャリア全体をふり返るライフストーリーの語り合いを実践した。そのため経験豊富なベテランの受講者の方が充実した自己省察となり、今回の実践をより有意義なものとして評価したとも考えられる。

＜②専門職としての自己を高める気づきを得る＞については、語り合いと傾聴を通じて「大切なことを再認識できた」「後輩保育者へのアドバイス、指導の仕方、人それぞれの教えるタイミングなどを学び、心の余裕ができた気がする」「子どもに向き合う姿勢や子どもを見る目が変わった気がする」等の感想から、ねらいは十分達成されたと判断したい。その他、受講者のレポートで目立ったのは、「ベテランの先生でも同じように考えていらっしゃるのだなと安心するところも多くあった」「若い人の話を聞き、悩みや考え方がつかめてよかった」といった感想である。今回の講習では世代の違う受講者を混合してグループ・ワークを実施したが、これによって専門職どうしの世代間交流と学びの機会をつくることができたと思う。

＜③保育者・教師に特徴的なストレスや孤独を緩和する＞については、「笑顔で保育の悩み、コミュニケーションについてなど、ぐちまで話し合うことができました」「解決にはならない内容でも、共感してもらえた！という心地良さが私の中にも残りました」「悩んでいるのは私だけではないことを今日の語りいでしみじみ実感しました」等の感想から、ねらいは十分達成されたと判断したい。すでに述べたように、今回の講習はセルフヘルプ・グループの「わかちあい」をモデルにグループ・ワークを試みたものである。「わかちあい」と同様の「語ることを通じてのカタルシス」と「孤独の緩和」の効果が、専門職どうしの語り合いと傾聴でも得られることが確認できた。ただし、受講者からは「地域を離す配慮をしてくださっているとはいえ、やはり新潟市に近い人たちがばかりなので、全部を話すことができない」との訴えもあった。

＜④同じ職業に従事している新たな仲間と出会う＞については、「普段の研修では幼稚園の先生として話をしないので、今回は保育園の先生方ともいろいろお話ができてよかった」「自分は私立園に勤務しているので、他園の方と話す機会がない。いろいろな考えを聞けてとてもよかった」「グループの世代の違う5人の色々な経験が聞けて面白かった。とても親密な気持ちになった。翌週の講習ではグループの人とならんで座り、休憩のときも仲良く会話した」等の感想から、ねらいは十分達成されたと判断したい。上の受講者の感想にも見られるように、私立の幼稚園・保育所では1法人1園という経営も多く、人的交流が狭い範囲に限定されがちである。受講者の感想文には、講習を通じて他園の保育者・教師と交流できたことを喜び、評価する記述が多かった。それはまた、人的交流の拡充が幼児教育・保育に携わる専門職の教育および研修の課題であることを示唆している。

今後の課題についてであるが、今回の講習では40代、50代のベテラン世代の受講者から全般的に高い評価を得た一方で、30代の受講者からは「(自分には)立派な部分が少なくて『どうしよう』と不安になった」「自分はやや萎縮してしまった」といった感想も寄せられた。ベテラン世代の保育者・教師は自分のキャリアを総括したライフストーリーを語る事が可能であるが、専門職としての成長の途上にある中堅世代では、より具体的な実践課題をめぐっての経験の語り合いが適当であったと思う。次回の課題として、例えば「子育て支援」「保護者とのよりよい関係の築き方」等、より日常の実践に即した具体的な課題を提示して、各世代の参加者が実践知を検討し合えるグループ・ミーティングを工夫したい。また「自分たちのグループは早く語り合いが終わってしまったので、もう1テーマあったらよかったと思う」「1つのグループで語り合いと傾聴をするだけでなく、途中でグループを替えてみたい」等、講習の受講者からも課題の指摘と改善に向けた提案が寄せられている。これらも検討して次回の講習の改善に努めたい。

1 「ライフストーリー」については以下を参考にした。

桜井厚『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房, 2002.

桜井厚・小林多寿子『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房, 2005.

桜井厚『ライフストーリー論』弘文堂(現代社会学ライブラリー7), 2012.

2 例えば以下を参照。

丸山範高「現職国語科教師が理想とする、経験知としての授業実践知の特質に関する事例研究」和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 No.19, 2009, 63-69ページ.

全国大学国語教育学会『国語科教育』71, VII 課題研究 国語科教師の実践的力量をどう育むか,

第1章 ライフストーリーの視点から, 2012.

細川太輔「第1節 協働学習的アクションリサーチの提案」, 75-79ページ

甲斐利恵子「第2節 「大村はま国語教室」とともに」, 80-84ページ

萩原伸「第3節 励ましになりたい: ライフストーリー・ライフヒストリー研究と私」, 85-89ページ

藤原顕「第4節 ライフストーリーと国語科教師の力量形成」, 90-94ページ

山元隆春「第5節 実践を育む「対話者」との出会い」, 95-97ページ

3 「セルフヘルプ・グループ」および「わかちあい」については以下を参考にした。

伊藤智樹『セルフヘルプ・グループの自己物語論—アルコールリズムと死別体験を例に』ハーベスト社, 2009.

谷本千恵「セルフヘルプ・グループ（SHG）の概念と援助効果に関する文献検討—看護職はSHGとどう関わるか」石川看護雑誌 1, 2004, 57-64ページ

安川由貴子「アルコール依存症者の意識変容のプロセス—セルフヘルプ・グループにおける体験談を手がかりに」京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 2008, 9-25ページ

4 例えば以下を参照。

Clark, C. M. (ed), Talking shop: Authentic conversation and teacher learning, New York: teachers College Press, 2001.

末吉朋美「教師による『語りの場』の意義：ある日本語教師とのナラティブ探求を通して」阪大日本語研究 (23), 2011, 79-109ページ